

彙報

第四回「若手アルタイ学、
中央アジア研究者集会」

岡田英弘

第四回「野尻湖クリルタイ」は、例に依つて七月九日(日)から十三日(木)まで、長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルにおいて開催され、左記の三十五名の参加を見た。

阿南惟敏、趙承福、江上波夫、榎本方雄、恵谷俊之、萩原淳平、橋本勝、本田実信、石橋秀雄、神田信夫、小玉大円、小山皓一郎、間野英二、松田寿男、松本幹男、松村潤、森川哲雄、村上正二、中井英基、小谷仲男、岡田英弘、岡本敬二、岡崎敬、大沢陽典、朴正汶、佐口透、坂本勉、沢田勲、島田正郎、嶋崎昌、植村清二、若松寛、家島彦一、山口瑞鳳、吉田順一。

第一日の九日夜は registration とプログラム調整にあてられ、実質的には第二日の十日から日程に入った。先づ午前第一 session、及び午後の第二 session の一部は恒例の conferences が行はれたが、ここで語られた参加者の動静のなから目ばしいものを拾ふと次の通りである。

植村はティームール伝を準備中である。岡本の『通制条格の研究訳注第二冊』は近く刊行の予定である。小谷は京都大学の水野調査隊の一員としてアフガニスタン、パキスタンの仏教遺跡の発掘に参加、その後テヘランに六個月留学、目下調査報告の作成中。橋本は元朝秘史の中期モンゴル語動詞語尾を分析、*qu/ku* を数の觀念を含まないもの、*qu/ku* を単数、*qu/ku* を複数として解し得ること、またこれを他の語尾にも及ぼして考へ得ることを説いた。吉田は秘史の内容の史実性に対して疑問を提出した。松本はカルムイク語の Schwa 現象を研究中。若松はヌルハチ伝を執筆中。家島はヴォルガ・ブルガール族旅行記の訳注の完成に努力してゐる。間野は『五体清文鑑訳解下巻』の刊行を準備中。趙はストックホルム大学、ウプサラ大学において極東学を教授、捷解新語を通して見た室町期の日本語の音韻現象を研究、今回の来日は在日朝鮮人の日本語の調査のためである。本田は北海道大学に新設された北方文化研究施設の活動に触れ、オホーツク海方面の出土遺物の満洲のそれに酷似することを指摘した。島田は遼史百官志に録された官制の年代を聖宗末年と推定、宋、高麗、新出の金石史料に出る百官志未収の官名を輯めて『遼史百官志補』を編纂中で、同じ漢字で綴られてゐてもシナのものとは全く異なる職能を持つ可能性を説いた。岡崎は佐賀県唐津市を中心とする魏志倭人伝の末盧國の領域の調

査を実施中で、すべての考古学遺跡の地理關係を考慮せずしては東夷伝の解明はあり得ないと主張した。なお榎本、中井、沢田、家島等から、前年に設立されたアジア文化研究会の活動について報告があつた。

同日午後は松田が「オアシス農耕論」と題して講演を行ひ、沙漠のオアシス都市、草原のオアシス都市の二つの型を區別し、いづれも人工の環境であることを論証して多大の感銘を与へた。

第三日の十一日午前は「北方ユーラシア諸民族の社会構成」と題し、佐口の司会による symposium が行われた。山口は五世紀の初から七世紀に至る吐蕃の民族形成、国家形成について明快な説明を与へた。江上は古代日本の支配層と北アジアの騎馬民族との共通点を列挙した。その他村上（モンゴルの部族制）、本田（イル・ハン）、恵谷（同上）、岡田（明代のモンゴル）、間野（モグリスタン・ハン）、若松（カルムイク）からそれぞれ所見が述べられた。

午後は研究報告で、「アルタイ学の新資料」のテーマで発表が行われ、神田「満文原檔と老檔」、岡田「蒙文年代記概論」の後、植村は突厥画象石の拓本を示した。

十二日の午前は、研究報告の続きとして山口「チベット史料の特質」、恵谷「我が国におけるペルシア文献研究の現状と課題」があつた。

午後は excursion として野尻湖対岸の江上の別墅を訪ひ、江上夫妻の歓待を受けた。そして夕食後、残つた二十名は総括討論を行つたが、今年の成果の評価と来年の計画とを議し、来年の会期は七月十一日（水）から十五日（日）までとする事が主張された。そして十三日の朝食をもつて正式に閉会したのである。

